

宮田守男

フィールド風

(現場)からの

240

雨が降り続いた7月4日、小谷村と白馬村に災害対策本部が設置され、住民に避難勧告や避難準備情報を出すなど対応に追われた。長野気象台によると今回の雨が降り始めた6

月30日の午前0時から7月4日午後7時までの雨量は、白馬村で460ミリ、小谷村で323ミリを記録した。人的な被害の情報が聞こえてこなかったのは幸いだった。

私達が住む地域の急峻な山稜を抱く地形は、これまで降雨による災害の歴史でもある。昭和32年7月の231ミリの集中豪雨で谷地川・木流川が氾濫し70町歩が冠水被害。昭和34年9月の伊勢湾台風で松川堤防が決壊し北城小学校他家屋流失浸水114戸被害で国の災害救助法の適用。昭和59年の白馬村東部を襲った集中豪雨、昭

和60年・平成7年などの豪雨被害の恐ろしさを記憶している関係者が多い中、今回の連続降雨量460ミリは、衝撃的な数値だった。幼いころ、激しい降雨で地域の半鐘が連打

され、松川河川では、激流によって大きな石が、大きな音をたて流れた事を知る人が少なくなっている事も事実だ。昭和37年から着手した平川・松川直轄砂防工事の整備が進むにつれて、多少の降雨で

は、災害の考えさえ過らなくなってきた。尽力いたしたい関係者に感謝しかない。中国古代、斉国の宰相(日本でいう総理大臣)の管仲は、国を治める方策を論議してい

たとき、「善く国を治める者は、必ずまず水を治めると熟弁し、水を治めるといふことは、国を治める上で根本的な国家の大計であると強調した。水害などの被害は、経済発展と社会秩序の安定に

とって重要な影響を及ぼす自然災害であり、克服して国民生活の安定は、天下太平、国家繁栄をもたらすと国づくりの基本とした考えを、私達の地域でも、治山も含め活

かしてほしいと強く思った。7月は、世界各地から異常気象の報道や、九州豪雨を始め多くの地域から気象等の特別警報が発表され、最大級の警戒が呼び掛けられた。6種類の特別警

報や7種類の警報、16種類の注意報、なかなか詳細の内容を把握していない。どの様なケースで、大雨特別警報が発令されるのか理解しなくてはと考え



100年前は穏やかな小川だった「松川」、増水の繰り返して大河川に変貌。だが治水事業が地域を守る現場と実感する

せられた。異常気象は、何処に住んでいても起こるのではと実感した時期でもあった。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

安全な地域と認知される事は地域振興の観点からも大切な事だと改めて知る